

2021 年度（令和 3 年）

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科

博士前期課程 B 類（芸術工学専攻）

入 学 試 験 問 題

小 論 文 （ 60 分 ）

【 注 意 事 項 】

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は表紙を含め 3 枚あります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙は 1 枚(両面)配布します。
解答用紙には、受験番号、氏名を記入してください。
- 4 この冊子のどのページも切り離してはいけませんが、余白等は適宜利用してもかまいません。
- 5 試験終了後、問題冊子は回収します。問題冊子は持ち帰ってはいけません。

小論文

【設問】

近年、ユーザの日常的あるいは非日常的な体験を豊かにするための試みが、様々なアプローチで検討されている。資料1は「観光」を対象とした、ユーザの体験を豊かにするための研究に関する解説論文の一部である。この資料を読んで以下の設問に答えよ。

資料1の出典：北村尊義，“観光エクスペリエンスへの挑み”，ヒューマンインタフェース学会誌，Vol. 22, No. 2, pp. 4-5, 2002. (1.～2.および3.の一部を抜粋)

設問1

資料1で説明されている内容を200字以内で要約せよ。

設問2

今後、私たちの生活において、ユーザの体験を豊かにするためにあなたが必要と考える研究やデザインについて、具体的な場面(観光でなくても構いません)を1つ想定し、その内容を400字以内で記述せよ。



観光エクスペリエンスへの挑み

Challenge to the Sightseer Experience

立命館大学 北村 尊義

1. はじめに

観光立国の推進は21世紀における日本国での重要政策の柱に位置づけられている^[1]。それは、観光で多くの人々が訪問する地域では経済が潤うだけでなく、その地域の住民が誇りと愛着を持つようになり、地域の活性化につながると考えられているためである。しかし、新たに観光地を創出し、そこに環境客を呼び寄せ続けることは困難である。その根拠として、Butler^[2]の観光地ライフサイクル論がある。観光地ライフサイクル論とは、観光地には探索期、関与期、発展期、成熟期、停滞期、衰退・若返り期というライフサイクルがあるとする理論である。この理論に従うなら、観光地としてどれほど成功したとしても、いつかは停滞期や衰退期を迎えることになる。開館当初、多くの観光客で賑わっていた施設が、時が経つにつれて話題にされることもなくなり、閉館を発表する…ドラマのロケ地としてメディアに取り上げられ、一躍有名になったが、ドラマ人気の収束とともに訪れる人も少なくなる…といったケースは数多く存在する。そのため、観光地ライフサイクル論には説得力があるといえる。

それでは、観光地ライフサイクル論における停滞期や衰退期を迎える前に若返り期を迎えるにはどう

すべきであろうか。その鍵となりうる存在のひとつに、リピーター（同じ観光地に繰り返し訪れる人）があげられる。じゃらんリサーチセンターの調査^[3]によると、リピーターは、地域にある既存の観光資源（名所や旧跡など）よりもその地域のお土産や買い物スポット、スイーツやお菓子などを探し出す探索型観光を楽しむ傾向にあるという結果が示されている。また、その考察^[3]では、リピーターが新たな地域資源の創出に貢献する観光PRサポーターとなる可能性が指摘されている。では、リピーターを創出するシステムや仕組みはどのように考案し、実現するのか。筆者は、その答えを探求するためのフィールドが観光エクスペリエンスという領域に存在すると考えている。本稿では、観光エクスペリエンスのフェーズを分類し、研究のポイントについて紹介する。

2. 観光エクスペリエンスのフェーズ

観光エクスペリエンスのフェーズ分類には、大まかにわけて観光者側と観光サポート側の2つの視点が考えられる。観光者側の視点では、プレ旅マエ、旅マエ、旅ナカ、旅アトという分類が存在する^[4]。プレ旅マエとは、どこに行こうか決めるフェーズのことで、さまざまな土地の情報収集をしたり、とも

に行きたい家族や友人と相談したりしている状態である。具体的な目的地が決定すると、フェーズは旅マエに移行する。旅マエでは、名所をくまなく巡る・のんびりと1地点のみでくつろぐ・行き当たりばったり気の向くままに任せるといったスタイルが決定され、それぞれのスタイルにあった準備がなされる。旅ナカは、目的地に移動しはじめたときから帰宅するまでのフェーズであり、旅アトは帰宅した後のフェーズである。旅アトのフェーズでは旅ナカで撮影した写真を印刷してスケッチブックに貼ったり、共に同行した仲間たちと思い出話を共有したり、旅ナカで出会った人と連絡を取り合うということが考えられる。そのため、旅が思い出として想起されることがある限り、旅アトのフェーズが終わることはない。

観光サポート側の視点では、観光者のプレ旅マエ、旅マエ、旅ナカ、旅アトの体験を豊かにする「検討」→「立案」→「試行」→「実導入」→「効果の調査・確認」→「検討へのフィードバック」というフェーズ分類が考えられる。観光に関する情報工学分野では、このいずれかのフェーズにターゲットを絞る研究が多いのではないだろうか。

3. どう挑むのか

観光サポートの検討で第一に重要なこととして、どのようなタイプの観光をサポートするのかという“ターゲティング”を挙げたい。例えば、効率のよい探索観光を楽しみたいという人と、ガイド付きツアーのように行動のほとんどを誰かに委ねたい人に、同じ観光システムの提案を試みても両者の満足度がともに高まる可能性は低い。そのため、観光者

のプレ旅マエ、旅マエ、旅ナカ、旅アトにおける特定のスタイルを想定したうえで検討を開始する必要がある。

参考文献

- [1] 国土交通省観光庁：観光立国推進基本法（オンライン）、入手先 < <https://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/> >（参照 2020-03-03）
- [2] Butler R.W.: The Concept of A Tourist Area Cycle of Evolution: Implications for Management of Resources, The Canadian Geographer, Vol.24, No.1, pp.5-12, 1980.
- [3] じゃらんリサーチセンター：地域資源を見直すだけで再来訪率は上げられる！「じゃらんリピーター追跡調査」～リピーターが集まる観光地の創り方、とーりまかし、Vol.30, pp.2-15, 2012.
- [4] インバウンドNOW: 旅マエ・旅ナカ・旅アトとは？旅をまるごとプロモーションして訪日観光客の心をつかむ！！インバウンドNOW 入手先 < <https://inboundnow.jp/media/kuhow/2084/> >（参照 2020-03-03）
- [5] 北村尊義、于港、泉朋子、仲谷善雄：散策観光のための観光スポット距離時計における距離感の検証、計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会 2019 論文集, 2019.
- [6] Takayoshi Kitamura, Gang Yu, Tomoko Izumi, Yoshio Nakatani: Proposal of Onion Watch Application for enjoying a stroll, HCI2020 (Now publishing)
- [7] 北村尊義、守屋駿、泉朋子、仲谷善雄：旅ノート型システムを用いたリピーター創出手法の提案、情報処理学会第78回全国大会, 2016.
- [8] 植木蒼馬、北村尊義、泉朋子、仲谷善雄：なじみのある情報を提供する主体的観光支援システムの提案、ヒューマンインタフェースシンポジウム 2018, pp.764-769, 2018.